

ポーランド

上巻

ジェイムズ・A・ミッチェナー

工藤幸雄 訳

Poland

James A. Michener

文藝春秋

ポーランド

上巻

ジェイムズ・A・ミッチェナー

藤辛雄 訳

江苏工业学院图书馆
藏书章



POLAND
BY JAMES A. MICHENER
COPYRIGHT © 1983 BY JAMES A. MICHENER
CARTOGRAPHY © 1983 BY JEAN PAUL TREMBLAY
JAPANESE TRANSLATION RIGHTS RESERVED BY BUNGEISHUNJU LTD.
BY ARRANGEMENT WITH WILLIAM MORRIS AGENCY INC., NEW YORK
THROUGH TUTTLE-MORI AGENCY, INC., TOKYO
PRINTED IN JAPAN

ポーランド 上

一九八九年二月二五日第一刷

一九九〇年三月一〇日第二刷

著者 ジェイムズ・A・ミッチェナー

訳者 工藤幸雄

発行者 豊田健次

発行所 株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三―二三

電話 〇三―二六五―一一一一

印刷所 凸版印刷

製本所 矢嶋製本

万一落丁乱丁があればお取替えます

ISBN4-16-311460-2

謝辞

一九七七年、あるテレビ会社から誘いがあって、ドキュメンタリー番組を撮るのだが、世界じゅうどこでもよい、行ってみたい所があったら言ってほしいという。私はためらうことなく「ポーランド」と即答して相手を面食らわせた。理由は、と訊ねられて、私は答えた。「ポーランドの置かれた地理上またイデオロギー上の位置を見てみたまえ、きつと分るはずだよ——あそこそあと十年以内には、必ずやひとつの焦点になる所だ」と

それからの数年、私のポーランド訪問は前後八回、その足跡もほとんど全国に及んだ。ある方面からは一週間ほど、ヘリコプターを提供していただいた。ポーランド全土を超低空で飛び回るのに、これが役立った。人に勧められて、私は、各地の学校、大学、研究所、美術館、史蹟を訪れたが、そのうちに私は言い出した——「英語の話せるカトリック司祭とぜひ一緒に過してみたい。いちばん必要なのは、それだと思う」

さいわい、私はクラクフの大司教に引き合わされ、その人と一連の実りある会話の機会を持った。カロール・ヴォイティワ、のちのローマ教皇その人である。その後、私は首座大司教ヴィシンスキ、グレンプのご兩人とも時を過し、この方がたのお蔭で、共産主義国における教会の活動とはいかなるものか、この目で見る事ができた。

華麗な休暇を送った先がたまたまワンツウト宮であったのは巡り合せであったが、それを機に、

あととはわざわざ足をのばしてポーランドの魔法めいた城館十カ所あまりに巡回の旅をしたものである。もっとも、私はそれと同じくらいの時間を割いて、カトヴィツェの重工業地帯やグダンスクのレーニン造船所に赴いている。車を駆って回ったポーランドの各地の旅は数千マイルに及んだ。

こうした取材旅行の案内に立ってくれたのはポーランド系アメリカ人のエドワード・J・ピシエク君であった。その人間的な関心の深さから、彼はポーランド事情につよい愛着を寄せ、ポーランド生活のほとんどもを知り尽くしている人物である。車の運転は、同君の助手、スタンリー・モシユク君がたいてい引き受けてくれた。美術や歴史に通曉した有能なポーランド市民である。

一九七九年、私はポーランドの危機的な変遷のあとを辿る長篇小説の執筆を思い立った。そうになると、ポーランド語を話せず読めもしない私としては、当然のことながら、文献上の助けが必要不可欠と知った。ピシエクとモシユクの両君が知恵を出してくれた——ポーランドの一流の知識人、十人ほどに依頼して、十五の重要分野に関する最近の著作物の要約を作らせてはどうか、というのだ。学者は両君を選び、私がテーマを決め、望外の協力態勢がスタートした。学者は、謝礼と引換えにそれぞれ得意の分野の参考文献の要約を出す、こうして私は現今の権威者によるポーランド史の見方を集めた貴重な綜合文献を手にしたのだ。

そのポーランド語をこんどは、専門家に訳出してもらった。この場合も、原著者と同じくらい問題の分野に詳しい人にお願した。さらに、この人々やまた他の学者多数の協力を得て、私は研究資料をたっぷりと手もとに揃えた。このなかには原著はポーランド語だが現在は英訳で入手できるものも含まれる。

膨大な資料をいちおう読みこなしたあと、数年来、構想を温めてきた長篇にとりかかる自信がつくと、私はポーランドの地に舞い戻った。折から一九八一年夏で、私は小説の舞台に予定している先ぎきを残らず再訪した——第一次大戦の激戦地、タンネンベルク（現オルシティン県ステンバル

ク)、ドイツ騎士修道会の本拠、マルボルク、ヨーロップの小都市のうちでも最も由緒あるひとつ、ザモシチ、規模の雄大さには目を疑うばかりのクシシュトプウルの古城、魅惑に満ちたムニシエフ家の居城ドウクラ、古都クラクフではその昔、タタールの来襲を告げつつ倒れたラッパ手に思いを馳せ、わが長篇物語が繰り拡げられるヴィスワの河岸をながめた。作中に出てくるポーランドの地名のなかで、私の訪れなかった場所はない。かつてはポーランド領内のキエフもその例外ではない。十七世紀の末、ポーランドの国王ヤン・ソビエスキが遠征軍を率いてはるばるウィーンへと出陣した道を、一マイルまた一マイルと辿ったし、トルコ軍の包囲を突き破って国王がみごとこの街を守りぬいた跡も私はつぶさに見た。また私は国境地帯の全域に赴きもし、戦さに出で立つ登場人物の旅程を追った。再びワンツウトの城館に暮らした日々には、この城の女主人、女傑の公爵夫人イザベラ・ルボミルスカに客として招かれたわが身を空想した。公爵夫人は、かのゲーテ、フランクリン、またジェファソンを友とし、この三人からひとしく「才色兼備、ヨーロップ最高の女性」と絶賛された人物である。

なかでも忘れたくない旅は、お二人の高名なポーランドの学者と共に送った二週間の旅である。私 gaze び書きたいと狙っていた僻地のいくつかに案内役を務めてくださったのは、この人たちである。はるかにハンガリー国境を見守る人煙まれな要害、ニエヂツアの城もそのひとつであった。

特筆すべき経験もした——チェコスロヴァキア領でスピード違反のため一時間半のあいだに二回も検問にひつかかったのだ。最初は時速四十マイル、二度目は四十五マイルであった。「ナンバープレートがポーランドのせいではないやがらせをするんですよ」と同乗者のひとりがこぼした。もちろん罰金はチェコの通貨払いである。だが、そのコルナ貨と両替できるのは、検問所から何マイルも先だ。私たちは、三回目の検問にかけようとするチェコ警察の鼻先をかすめて、ようやくの思いで脱出した。私がポーランドをあとしたのは戒厳令強行のわづか一週間まえのことであった。

以上、いろいろと書きつらねたが、強調したいのは、私の周囲には絶えずポーランドの男女の得がたい一団が取りまき、友情と助言を惜しまなかったことである。ぜひ触れたいと私の考えるポーランドの歴史の局面、そのそれぞれについて私と何時間でも話し合ったのは、この人たちであった。ふつうならば、これまでの作品でそうしたように、私はこの人たちの名をあげ、その錚々たる地位、また学術研究の業績などを明らかにしたいところである。しかし今の現地の風潮のなかで、そうすることが彼らに実害となるのか、あるいは有益なのか私には確かめようがない。

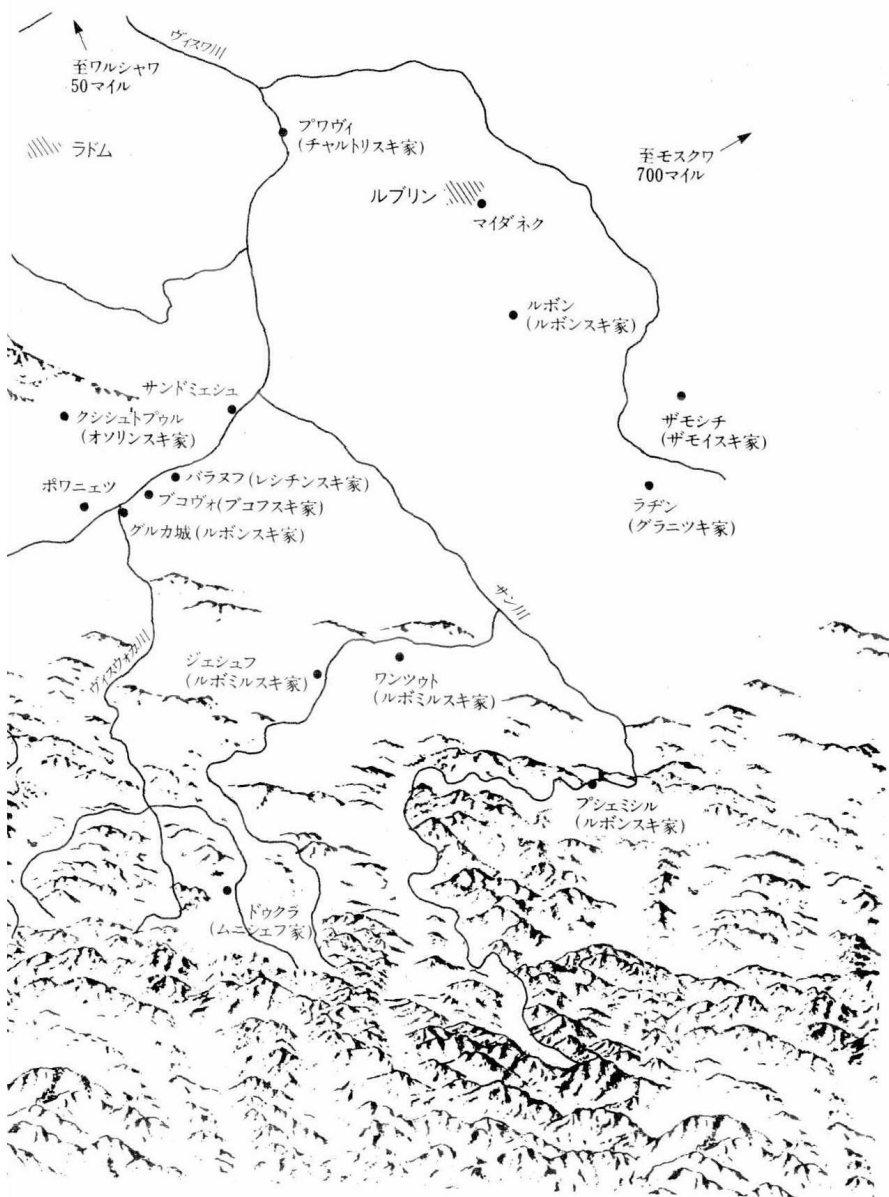
私に分っているのは次のことである——彼らが真のポーランド人であったこと、彼らが彼らの国を愛していること、限らない愛着をこめて、この国について語り、みじんも反感を示さなかったこと。彼らはより高い次元の愛国者であった。アウシュヴィッツとマイダネクに同行してくれたふたりが、絶滅収容所の日常について事こまかにその惨状を物語ったとき、私は涙を禁じえなかったほどである。

本書は、それらの人々に捧げられる。私の願いは、彼らが彼らの国、ポーランドについて語りながら見せたあの情熱の片鱗たりとも、この作品によって伝えることである。

なお完成原稿はマリアン・トゥルスキ教授（在ローマ）およびクララ・グロチエフカ女史（在ニューヨーク）に閲覧をいただいた。ご両人に対してここに深甚な感謝の意を表したい。







Applied from the map drawn by J. P. Tremblay

物語の舞台

0 20 40 マイル
0 20 40 キロ

チェンストホヴァ

キエルツェ

← 至ベルリン
275マイル

カトヴィツェ

クラクフ

ヴァスワ川

タルヌフ

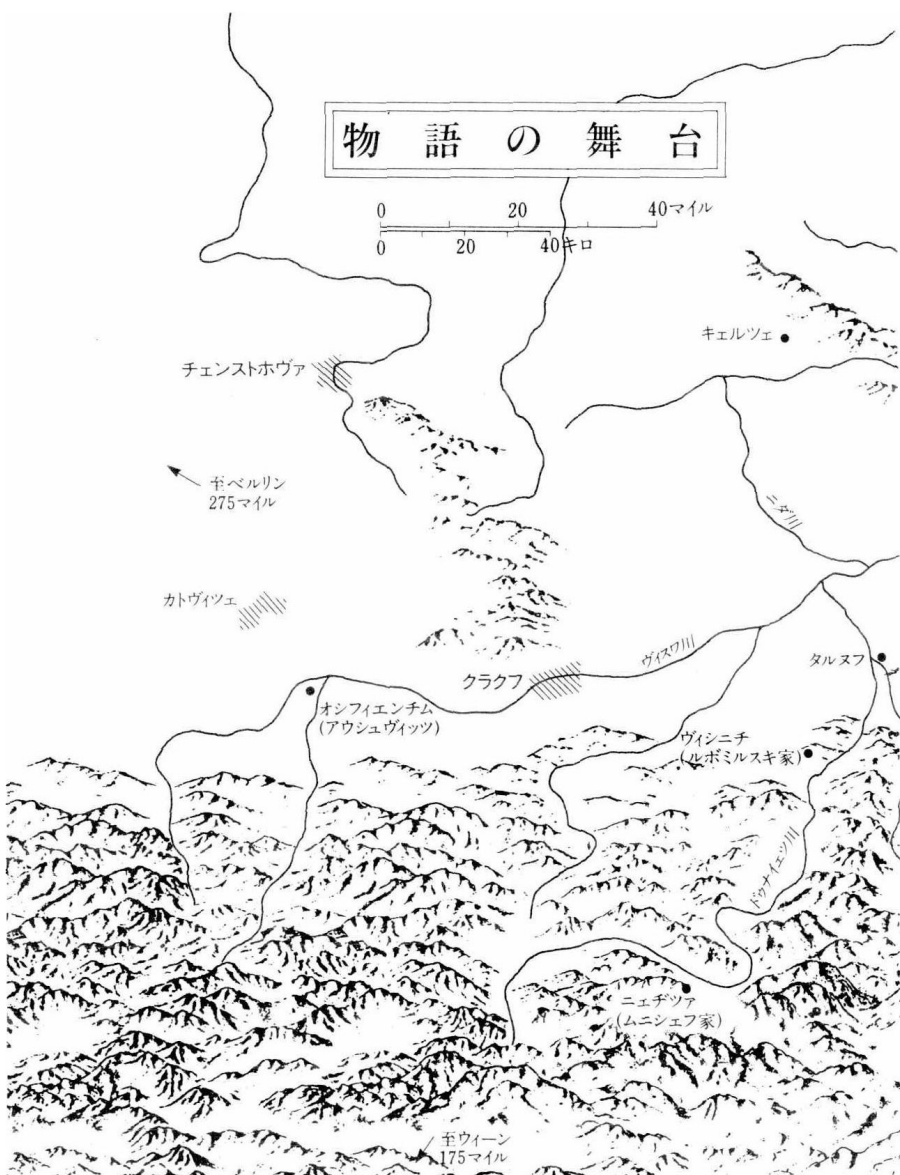
オシフィエンチム
(アウシュヴィッツ)

ヴィシニチ
(ルボミルスキ家)

ドナウイッツ川

ニェチツァ
(ムニシェフ家)

至ウィーン
175マイル



目次

I	ブック vs. ブコフスキ	15
II	東方からの敵	51
III	西方からの敵	101
IV	北方からの敵	171
V	南方からの敵	251
VI	黄金の自由	327
	下巻までの橋渡し	481

VII マズルカ（以下下巻）

VIII 碎かれた夢

IX 暴虐

X 再びブック
vs. ブコフスキ

訳者あとがき

装幀
坂田政則

ポ
ー
ラ
ン
ド
上
卷

本書を楽しむために

一、これは「ポーランド」を主題にアメリカ人が書いた長篇小説を日本語にしたものです。物語は、初めと終りが危機の年一九八一年であるほかは十三世紀から二十世紀までの各時代に、この国に起きたドラマを生々しく描き出します。

二、主な主人公となるのは、同じ村に代々、暮しつづける三家族、ルボンスキ家、ブコフスキ家、それとブツク家。家の格式は、この順序に、上流の貴族（のち伯爵）、下級の貴族、そして水呑み百姓です。これらの家名もブコヴォ村も、もちろんフィクションですが、事件や人物の多くは史実を踏まえています。読み進むうちに、読者は歴史または物語の大きな流れに身を置くことになります。

三、訳者の考えで補った個所があります。その個所は「」で挟んで示しました。目うるさければ、飛ばしても構いません。原著者のちよつとした思い違い

（例えば「ポルカ」がポーランドの伝統音楽である）もそこで指摘しました。

四、ポーランドの苗字は男と女によって区別されることがあります。例えばルボンスキ家の夫人や令嬢が「ルボンスカ」なら、ブコフスキも同様に「ブコフスカ」となる。また、ヤドヴィガという女性の名は愛称ではヤーチャなどになります。どうか惑わされないように。

五、タタール族の侵攻をテーマにした、第二章「東方からの敵」では日本式の度量衡の単位を用いました。時代・場所との違和感を抑え、古い感じを出したいと考えたからです。それ以外では、マイル（約一・六〇九キロメートル）などを原著のまま用いました。六、日本語の表記についても、多少わがままを通しました。「まづ」「づつ」に見られる「づ」の多用、また「終る」「変る」「起る」「代り」の送りがない省略、「込」という国字は使わない、その他です。すぐに慣れてくださるといいのですが……。 （訳者）